

あなたの一番になれたらいいのに

プロローグ

まだだ……

今日もあの時の夢を見て目が覚めた。

和範かずのりと婚約をしてから、幾度となく見るようになった悪夢。

私は一体いつまでこの夢を見なければいけないのだろう。確かに、あの時のことは誰にも言わず、一人で十字架を背負う覚悟を決めたのは私自身だ。だが、自業自得とは言えいつまで苦しめばいいのだろうか。

今は真冬。部屋は凍えそうなくらいに冷え切っているというのに、私は汗だくだった。また、いつものようにうなされていたのかもしれない。

私は布団の中からベッド横のカラーボックスに手を伸ばし、スマホのアラームを止めた。

時刻は朝の六時を少し回ったところだ。カーテンの向こう側には、まだ夜明け前の微妙な色合いの空が広がっている。

一月最終日の今日は忙しい。月末は残業が確定しているのだから、のんびり過ごしている暇はない。

私はゆっくり起き上がると、スマホの横に並べて置いていたリモコンで部屋の電気を点けながら、そっと溜息を吐いた。

あの夏の夜の出来事を、私はずっと忘れない。たとえばあなたが覚えていなくても。

湿気がじめじめと肌にまとわりつくような熱帯夜。常夜灯の光に照らされた、エアコンのよく効いたあなたの部屋。遠くで打ち上がる花火の閃光と、遅れて届く爆発音。ベッドの下に散らばった、無造作に脱ぎ捨てられたあなたの衣服。

高校時代にバスケットボールで鍛えた身体が、常夜灯の陰影で一層逞しく見えて、いつも以上にあなたを男性だと意識させられる。

ベッドの上に組み敷かれて、滴り落ちるあなたの汗を肌を受けながら、耳元で囁かれた『好きだ』の言葉。その言葉をどれだけ私が待ち望んでいたか、和範、あなたは知るはずもないだろう。

行為の最中に情熱的な愛を囁かれて、嬉しくない人がいる訳ない。

それが最愛の人なら尚更のこと。

たとえばあなたの見ている相手が、私でなく双子の姉であったとしても。

私は無我夢中であなたを求めていたし、あなたもそうであったと信じている。身体を繋げたあの時だけは、あの子のことも考えられないくらいにあなたに溺れていた。

最後まで、私の名前が呼ばれることはなかったけれど……

それでもあの時、あなたに抱かれていた私は、あなたの最愛の人だったと思わせて欲しい。

私はあなたの一番大切な人なんだ、と。

胸の内に秘めた甘く切ない痛みを隠しながら、私はあなたから与えられる初めての快楽を貪った。行為のあと、あなたはお酒の酔いが抜けていなかったせいか、あるいは疲れ果ててしまったのか、私に覆い被さったまま気持ち良さそうに寝息を立てる。

その身体の下から身をよじって抜け出すと、私は改めてあなたの寝顔を見つめた。

その寝顔は無防備で、まるで出会ったばかりの頃のように幼く見える。

私の気持ちなんて知る由もなく、行為が終わったそのままの状態で眠ってしまったあなたの寝顔に、心の中で問いかけた。

ねえ、やっぱりあなたは、あの子のことを愛しているの？

当然ながら、返事はない。でも、そんな私に追い打ちを掛けるかのように、あなたは寝返りを打ちながら、無情にも寝言を発する。

それは、よりによって私が今一番聞きたくない名前。

「……り、……か、り」

その言葉に、私の心が悲鳴を上げる。

やめて、今はあの子の名前を呼ばないで！ お願いだから私の名前を呼んで！

そう、咄嗟に口に出しそうなのを必死でこらえる。

抱かれたことを後悔なんてしていない。私の身体の至るところに、あなたが愛してくれた印が残っている。優しく触れてくれた手の感触が、愛を伝えてくれた唇の感触が、私の下半身にあなた

が確かにいた感覚が、甘い疼^{うず}きが残っている。あなたが与えてくれた熱を、私の身体が覚えている。あなたに抱かれるなら、あの子の身代わりでもいいと思っていた。そう望んだのは私自身だし、絶対に後悔しなれと思っただけだから。けれど……

欲張りな私は、やっぱりあの子ではなく私を見て欲しいと望んでしまう。あの子の名前ではなく、私の名前を呼んで欲しいと望んでしまう。私だけを愛して欲しいと願ってしまう。

あれから何年も経た今でも、私はあの日のことを夢に見る。

夢の中でどれだけ身体を重ねても、未だに彼と心が重なることはない。

私はあの日、姉の恋人である和範を騙して、姉を裏切らせた。

そして今もまた、私は彼を縛っている。この、身体に負った傷のせいで……

あの夢を見て目覚めたこんな日は、後悔という名の深い闇から抜け出せなくなる。そこには希望という名の光は見つからない。

それなのに、願わずにはいられない。身勝手だとわかっていても……

ねえ、お願いだから私だけを愛して欲しい。

私の心が壊れてしまう前に――

第一章 婚約者

図書館内に、閉館を知らせるメロディが流れる。

私は返却された書籍に目を通して、修繕が必要なものかどうかを選別していた。大量に積まれた書籍を一冊ずつ、その全てを確認するのは、眼への負担が半端じゃない。仕事中だけ掛けている眼鏡を外すと、ポケットの中から目薬を取り出し、両目にさした。

交通事故の後遺症で左足の歩行に障害がある私は、書籍を所定の位置へ戻して回るような、歩いて行う作業ができない。そのため、座ってできる仕事を担当している。

「月末だから今日はいつも通り残業になるけれど、大丈夫？」

目薬をさし終えて眼鏡を掛け直していると、背後から先輩司書である坂本^{さかもと}さんに声をかけられた。坂本さんは四十年代後半で、二児の母だ。

お子さんは中学生と高校生。そんな大きな年頃のお子さんがいるようには見えないくらい若々しいので、この図書館に赴任した当初、年齢を聞いた時にはとても驚いた。

確か下のお子さんは、そろそろ高校受験を控えている。

自身の家庭も大変な時期なのだから、毎月のこととはいえ残業などせず早く帰りたいに違いない。現在、時刻は十八時を回ったところだ。

普段ならあと三十分もしないうちにみんな退勤するけれど、今日だけはそうもいかない。貸出書籍の未返却者をリストアップしたり、新刊入れ替えをしたりと、月末にだけ行う業務が多数あるのだ。

みんな日中からできる範囲で業務を前倒しするけれど、図書館利用者が多いうちは作業を進めるのが難しく、結局残業することになる。

「もちろん大丈夫です」

私は笑顔で返事をする。

坂本さんは、手に持っていたペットボトルの紅茶を私に差し入れてくれた。

「婚約者さんに、連絡しなくてもいいの？」

私が作業している机の上には、修繕の必要な本が山のように積み上げられている。

その脇の台車にも、返却を受け付けただけで手付かずの書籍がまだたくさん残ったままだ。

修繕不要の綺麗な状態のものもあれば、故意に破られてしまったものや、経年劣化でページが剥がれ落ちそうになっているものもある。修繕するか否かだけでなく、修繕方法が異なるものも選別しなければならなくて、その膨大な量に坂本さんも毎回目を丸くしている。

坂本さんから渡されたペットボトルを遠慮なく受け取ると、お礼を言っただけで返事をする。

「お気遣いありがとうございます。月末が残業になるのは彼もわかっていますから。いつものことなので、帰る時に連絡すれば問題ないです。坂本さんこそ、おうちのほうは大丈夫ですか？」

私が聞くと、坂本さんも空いた席に腰を下ろし、自身が手にしているペットボトルのお茶を飲み

ながら答える。

「うちも今日は、夫が早く帰ってくるから大丈夫。ご飯も朝のうちに準備してきたから、あとは温めるだけだしね」

子供たちももう自分のことは自分でできる年齢だから、と言うと、ちょうど目の前を通りかかったパートの井上さんに指示を出す。

そして坂本さんは、早く終わらせようね、と笑顔を見せて、自分の業務に戻っていった。

婚約者、か。

その言葉に、心が沈む。

分別を終えた私は、ページが破れた書籍の修繕作業に取り掛かりながら、そつと溜息を吐いた。

私は宮田光里、二十七歳。

この公立図書館で司書をしている。

司書とは、図書館において資料の選定から貸出、読書案内に至るまでの全般的な業務を行う専門職だ。

具体的な資格は司書と司書補の二つがあり、どちらも図書館法により国家資格に定められている。資格取得のためには司書講習の受講、または大学で必要な科目を履修することが必須である。

私は司書になるのが子供の頃からの夢だったため、大学時代に資格を取得して地方公務員試験に合格し、現在に至っている。

司書の役目は、大きく分けて二つある。

一つは資料の管理や蔵書を熟知し、利用者の目的に応じた資料の提案などをする、「利用者と資料を繋ぐ」役割。

そしてもう一つは読書活動を^{うなが}促し、「人と本の距離を縮める」役割である。

つまり図書館資料のスペシャリストとして、「人」と「本」を繋ぐという目的のもと、仕事をしているのだ。

私も実際に図書館勤務の司書となり、「人」と「本」を繋ぐお手伝いができるこの仕事に誇りを持つている。

私にとって司書の仕事は全く苦ではない。

元々小さい頃から本が好きで、公務員試験に合格して運良く通い慣れていたこの図書館に勤務することができた。もし図書館に勤務できなくても出版社や書店など、とにかくなんらかの形で書籍に関わる仕事をしたいと思っていただけに、本当に恵まれている。

この図書館に在籍している司書の資格保持者は、公務員としての正規雇用されている坂本さんと私、あと数名で、残りの半数以上の職員は司書の資格を持たない二年契約のパートさんだ。

長らく不況の中、市は雇用救済措置で定期的に図書館職員の雇用募集をかけており、二年間の契約を更新しないという条件で、パートさんが採用される。

なのでようやく図書館の仕事に慣れた頃に契約が切れて、新たに採用される人にまた一から教えて……というループがここ何年も繰り返されていた。

確か来月末で、一人契約が満了し、再来月にはまた新しい人が採用される。

そんな頻繁に人材を入れ替えず、慣れた人をずっと置いて欲しいという現場の意見は、市の決定事項の前ではなんの意味もない。

坂本さんからの差し入れを飲んで一息吐こうと、私は眼鏡を外した。ペットボトルの封を切り紅茶を口にすると、疲れた身体に甘いそれが沁み渡る。眼精疲労がひどくて頭痛もするもの、そんなことを言っている暇はない。休憩を終えると再び眼鏡を掛けて、改めて台車の上に置かれた書籍に目を通し、作業を再開した。

黙々と集中して作業し、終わったものは手付かずのものとまざらないように別の場所へ置いていく。修繕が終わると書籍を分類ごとに整理して、パートさんに本棚への返却をお願いする。

他の人たちも、リストアップした未返却者に電話連絡をしたり、新刊や雑誌の入れ替えを終えたりと、なんとか終わりが見えてきたようだ。

「明日もあるし、そろそろ帰ろうか」

坂本さんの声に、残っていた職員たちは一斉に片付けを始める。

戸締りの確認や、ブラインドの下ろし忘れがないか、といった館内の点検はみんなにお任せし、私は翌朝のために閲覧用の新聞を取り外しておく。

みんながそれぞれに役割を済ませてタイムカードを打刻すると、荷物を取りにロッカー室へ向かった。

図書館に制服はないけれど、代わりにエプロンが支給されている。業務が終わった今、みんなはエプロンを外して各自ロッカーの中にしまい込む。

図書館という場所柄、ラフ過ぎてもカジユアル過ぎてもいけないので、我々は毎日の洋服選びが大変だ。

私自身は元々地味な性格ということもあり、目立つことは苦手だ。だから私のワードローブも必然的に色合いの地味な無地の服ばかりになる。

たまには明るい色のかわいい洋服を着てみたいと手を伸ばしてみても、結局は試着にも至らず、あきらめてしまう自分がいる。

そんな洋服はきつと私には似合わない。私は灯里とは違うのだから……

灯里は私の双子の姉だ。二卵性双生児の私たちは、顔立ちこそ普通の姉妹よりずっと似ているものの、中身は正反対だった。

地味な私と、明るく社交的な灯里。

私にないものをなんでも持っている彼女は私の誇りで——同時に、ひどく劣等感を刺激する。灯里と比較されるのがいやで、ことさら明るい色、かわいらしいものを自ら遠ざけてしまうのだ。

いい加減、そんな自分がいやになる。

ロッカー室にある姿見で、今日も相変わらず地味な服装であることを再確認して、そつと溜息を吐いた。

そんな私を気に留めずみんなは荷物を取り出して、雑談をしながら通用口へ向かう。私もそれに倣って後をついていった。

周りのみんなは、いつも私の歩調に合わせてゆっくりと歩いてくれる。それを申し訳ないと思

ながらも、そんなみんなの優しさについていつい甘えてしまっている。歩行は杖を突きながらになるので、デスクワーク以外の業務をするのが難しく、仕事ではどうしてもみんなに迷惑をかけてしまう。それでも、こうやって社会復帰できただけでも本当にありがたいことだ。

公務員ならではの手厚い待遇には本当に助けられているし、なによりこういった身体になってしまった私に、事故前と変わらず居場所を与えてくれる仲間たちがいる。彼らには、本当に感謝以外の言葉が浮かばない。勤務先がこの図書館で良かったとつくづく思う。

「光里ちゃん、お迎え来てるよ」

坂本さんの声に、顔を上げて通用口の先にある駐車場を見ると、彼の車が停車していた。

私の婚約者である滝沢和範である。

身長は百七十八センチ、パツと見は線が細く見えるけれど、高校時代にバスケットボールをやっていたためほどよく筋肉質な身体だ。

ルックスも、テレビでよく見かけるイケメン俳優さんと並んでも引けを取らないくらいに整った顔立ちをしている。

「ほら、待たせちゃダメだよ。早く行って」

そばにいる坂本さん以外のメンバーも、和範に気付いたようだ。

通用口を出ると、みんなはまた明日、と挨拶をして足早に立ち去っていく。私も挨拶を返して、車のそばまで杖を突きながら、ゆっくり歩を進めていく。

いつも和範は、他の職員の邪魔にならないように図書館裏にある職員駐車場の隅に車を停車させる。なのに今日に限っては通用口に近い場所に停車して、私のことを待っていた。

もしかして、少しでも私の足に負担がかからないように気遣ってくれているのだろうか……？ そんな期待が胸をよぎる。

こんな寒い日は特に、左足の傷口がひどく疼いて、痛み止めの薬を飲まなければ辛い時もあるくらいだ。けれど、そのことを和範に話したことはない。

きつと偶然だ。そう思い直して、一つ溜息を吐く。

毎日朝も夕方もこのように送迎をしてくれているおかげで、図書館の職員たちは和範の顔をしっかりと覚えていて。おまけにルックスもいいので、婚約したと職場に報告した日には、みんなから羨望の声が上がってくるくらい、和範のファンは多かった。

今では毎日の送迎もみんなが温かく見守ってくれている。

私には本当にもつたいにくいくらい、献身的な婚約者だ。

そんな和範の献身を受けるたびに、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

三ヶ月前に婚約をした和範は、私と灯里の高校時代の同級生であり……私の想い人だった。

けれど、その頃の和範が付き合っていたのは私ではなく、灯里だ。

大学進学を機に和範と、そして灯里ともしばらく離れていた私は、その後の二人のことは知らな

い。そして数年前、私たちは交通事故をきっかけに再会したのだ。

自分に非はないはずなのに、和範は頻繁に入院中の私を見舞ってくれた。それだけでなく、私の身体に障害が残るとわかると、私にプロポーズをした。責任を取って、一生面倒を見ると……

けれどそれは愛情などではなく、きつと罪の意識からに違いない。

私が、彼の人生を壊してしまった。

だから、私には彼を愛する資格も、ましてや愛される資格もない。

和範の隣にいるべきは、私ではないのだ。

彼が見ているのは、あの子——灯里なのだから。

コッソ、コッソ、と夜の静寂に、私の杖の音が響いている。

和範は車の中でスマホを操作しており、私に気付いていないようだ。

もしかして、スマホでやり取りをしている相手は、灯里だろうか……？

せつかく和範に会えて嬉しいと思う気持ちが、和範の行動一つで沈んでしまう。

和範の乗るセダンの窓を軽くノックすると、音に気付いた和範がこちらを向き、スマホを座席に放置して、わざわざ運転席から降りてこちらへ向かってきた。

「遅くまでお疲れさま、光里ちゃん」

いかにも『待ち侘びてました』と言わんばかりの極上な笑みを浮かべて助手席のドアを開けると、私から杖とバッグを受け取り、それらを後部座席へ置いて私を助手席に座らせる。

傍から見れば、愛されているように映るだろう。

だが、確かに大事にはされていても、そこにあるのは恋人のような甘さではない。ただ、自分が障害を負わせた相手に対する気遣いだけだ。

和範は私が助手席に座ったのを確認してから車のドアを閉め、運転席へ戻る。運転席に放置されていたスマホをポケットにしまい込む姿を見つめていると「会社の人からだよ」と優しく返された。

お互いシートベルトを締めたのを確認し、和範は胸のポケットに仕舞っていた眼鏡を掛け直して静かに車を発進する。

日常生活では問題ない程度の視力だというけれど、運転時には眼鏡を掛けている。正統派なイケメンは黒縁眼鏡がこれまたよく似合う。これ以上女性ファンが増えたらどうしよう、と内心では心配するものの、それを顔に出すことができないでいる。

「ご飯、まだだよね？」

考え事をしてうわの空の私は、和範に話しかけられてビクツツとしてしまう。

「あ……、ごめん。なにかな？」

「晩ご飯、まだ食べてないかなと思って」

時刻は二十一時二十分、もちろん残業中に食事をとる時間なんてない。

口にしたのは、夕方坂本さんから差し入れてもらった紅茶だけだ。

「うん、まだ」

私の返事に、和範が食事の提案をする。

「時間も時間だけど、よかつたら軽く食べて帰らない？」

和範はハンドルを握ってまっすぐ前を向いている。過去の事故のこともあり、運転には細心の注意を払っているのがわかる。

もしかして和範は夕飯も食わずに私を待っていてくれたのだろうか。もしそうだとしたら申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

……いや、和範だって仕事忙しいから終わった時間も遅かったのかもかもしれない。私のために食事をせずついて待っていてくれた、だなんて自惚れてはいけない、余計なことは口にしないほうがいいだろう。

「うん。……でも今日は疲れてるから、このまま家に送ってもらっていいかな？」

本当は、一緒にご飯を食べに行きたい。こうやってもう少しそばにいたい。

でも口から出る言葉はそんな心とは裏腹だ。

どうしても、灯里のことを考えると和範に対して一歩引いてしまう。

私が和範という幸せそうにしていたら、灯里の笑顔を曇らせてしまうのではないか。そう思うと怖くなる。

それでも、和範への想いも止められない。和範と灯里への気持ちの板挟みで、どうすればいいのかわからない。だからいつも、逃げる道を選んでしまう。

そんな私の気持ちなんて知らない和範は、いつもあっさりど騙される。

「そっかぁ。疲れてるのに無理はさせられないな。じゃあ、今度早番の時、晩ご飯食へに行こ

うね」

「うん、そうだね」

いつだって私に対して優しい和範。それに対して心の中で謝る私。いつも優しく次の約束をしてくれるのに、私はそれを守ることができないでいる。

和範も忙しい時間を割いて送迎の時間を作ってくれているから、当然業務にしわ寄せが出てしまっているのだろう。

だから送迎以外では仕事を優先できるように、私から約束を取り付けることはない。

いつも、和範のほうからこうやって色々提案してくれるけれど、私はそれに従うように見せかけて、最終的には流れるように仕向けてしまうのだ。

自分でもひどいことをしている自覚はある。

そんなことで、灯里と和範に対する懺悔ざんげになるとは思えない。それでも、自分だけが和範と二人で楽しむことなど、許される気がしなかった。

おそらく私の態度を見て、和範も薄々は気付いているのだろう。私が姉に遠慮していることを。

私の二卵性双生児の姉であり、和範の最愛の人、灯里。

本当なら、和範の婚約者としてこの席に座って幸せに微笑むのは、彼女のはずだ。

私の和範への想いは、大学生だったあの日、断ち切ったはずだった。

それなのに、私たちの関係は、あの事故で大きく狂ってしまった。

あれは三年前——正確に言えば二年と三ヶ月前の十一月七日、水曜日。

あの日は仕事を休んで、久しぶりに日中の公園へ散歩に出かけていた。

公休日は基本的に週二日のため、月曜日の休館日ともう一日休日を選べる。私は木曜日を公休日にあてていた。

だからこの日の休みは、公休とは別に事前に申請して取得したものだ。

俗に言う有給休暇である。規定で取得しなければならない公休と違い有給休暇はなかなか取得しづらくて、体調を崩した時くらいにしか消化していなかったけれど、今回は特別だった。

この日は三歳年上の父方の従姉いとこであるなっちゃん——宮田奈津子みやたなつこの結婚式が近く、挙式披露宴で着る洋服を買うため、灯里とランチも兼ねて一緒にショッピングモールへ行く約束をしていたのだ。

朝から天気も良く、私は爽やかな秋の風を感じながら、公園にある東屋あづまやのベンチに座って読書を楽しんでいた。

それは職場である図書館で借りた本ではなく、先日書店で購入したもので、大きな文学賞を受賞した作家の新作だ。

館内では新刊をすぐ入荷しないため、どうしても早く読みたいと思った本は、入荷前に自分で購入する。

メディアでの前評判や書店の手書きPOPに惹かれて読むのを楽しみにしていたその作品は、やはり私の期待を裏切らなかった。

読み手である私を、本の中の独特な世界にガイガイと引き込んでいく。

読書をしていると、集中してしまつて時間があつという間に過ぎていく。だからスマホのアラームをつけて、約束までの時間を忘れないようにしていた。

このあと灯里のランチタイム出勤後にお店にお邪魔してご飯を食べてから、ディナータイムまでの空いた時間、一緒に買い物をする予定だ。

灯里との買い物は、いつも食器やら調理器具、書籍といった、お互いの趣味や仕事に関わるものばかりだったので、洋服を買いに行くというのは非常に珍しいことだった。

隣の大学に進学して四年間実家を離れていたし、長期の休みは将来奨学金の返済資金に充てるためにバイト三昧だった私は車の免許を持っていなかった。だから就職でこちらに帰ってから、出掛ける際にはなんだかんだと灯里に付き合ってもらっている。

『今日の賄いは、オムライスを作るね。だから必ずお店に迎えに来てね』

出かける時に、灯里から言われた言葉だ。

オムライスに釣られる私も私だけれど、料理人である灯里の料理は本当に美味しい。

ふわふわの卵はもちろん、中のチキンライスも他の人には同じ味を再現することはできない絶品だ。

灯里は幼少期から料理を作ることが好きだった。

美味しいものをみんなが幸せそうに食べるのを見たい、という思いから料理人を目指し、高校卒業後は調理師の免許を取得するために専門学校に進学した。

そして、専門学校卒業後に地元料亭の調理場で修業を積んでいたところ、流行りのダイニン

グバーを経営する知り合いにスカウトされ、現在に至る。

オーナーの奥さんが調理師専門学校時代の同級生だということもあり、気心知れた相手がビジネスパートナーでやりやすいと、転職当時私に話をしていた。

和、洋、中、なんでも器用にこなす灯里は、きっと料理人として店側に重宝されるのだろう。

灯里の勤務するダイニングバー『彩』は、元々夕方からの営業だけだった。

それが夜の時間の常連さんから『灯里ちゃんの作るランチが食べてみたい』とのリクエストがあり、お試して数日限定のランチタイム営業をしたところ大盛況だったということで、現在は月火水の週三日、灯里がお昼の担当で営業している。

他の曜日はオーナー夫妻が調理担当なのだが、灯里の担当日との売り上げが全然違うとボヤいているそうだ。

お店の人気や評判は、オーナーの人柄もあるけれど、やはり料理人である灯里の腕によるところも大きいのだろう。

ランチメニュー限定のオムライスが飛び抜けて人気で、灯里以外の人が作るものなら、なにかが違うと誰もが口にするのだという。

そのおかげで近頃は灯里が担当する日に限り食数限定の『魔法のオムライス』という特別メニューとして売り出しているそうだ。

お店は噂を聞きつけたお客さんでにぎわいを見せている。

灯里は調理器具にもこだわりがあるので、きっとそれも味に大きく影響しているのだろう。

でも決して灯里は、それを自慢したり鼻にかけたりしない。『料理人として当たり前のこと』なのだそう。

灯里曰く、愛情を込めて作っているから一味違う、ということらしい。

私と灯里は双子なのに、私には料理の才能がない。当然のことながら私は専門の知識もないし、調理師の資格だって持っていない。プロじゃないのだから、そこまで気にしなくてもいいとはわかってはいるけれど、やはり灯里が器用に料理を作るのを間近で見ているだけに、どうしても自分で料理をする時は、つい灯里と比較してしまう。

その度に、私と灯里の違いを思い知らされる。

私たちは二卵性双生児ではあるけれど、髪型以外で見分けが付かないくらいにそっくりだったので、小さい頃から見た目の区別をつけるために、灯里は髪を伸ばし、私は長い時でも肩につくつかないかの長さのミディアムボブにしていた。

灯里の髪は少し癖があり、パーマをかけているみたいな緩いウェーブが出る。

灯里はうねりがあるからスタイリングし辛いしやだと言っけれど、ふんわりとした雰囲気は灯里にぴったりだと私は思う。

対する私はサラサラストレートで、癖がつきにくいために色々とアレンジしてもすぐに元通りになっってしまう。

ちょっとした髪質の違いでも、灯里のふわふわなロングヘアはかわいらしく華やかで、私のまっすぐで硬い髪は地味なだけでなく、まるで私の融通の利かない性格を表しているようだった。

華やかな灯里と地味な私。

双子だからと物珍しく見られることもあったけれど、近年は似てると言われることも少なくなっただ。

私はそれが嬉しい。

灯里は、似てると言われなくなって淋しいと言うが、果たして本心はどうだろう。

そんな思考は、スマホの振動に止められた。十三時半に設定したアラームだ。

私は本にしおりを挟むと、スマホのアラームを止めてそれらをバッグに仕舞い込み、東屋のベンチから立ち上がった。

灯里のランチタイム出勤が終わるのは十四時。今からお店に向かえば、充分間に合う時間だ。

お腹が空いた私は、灯里の作ったオムライスを食べるためにダイニングバーへ急いだ。

公園を出ると、ちょうど信号が青に変わったところで、私は道路の左右を確認してから足早に横断歩道を渡った。

ビジネス街を歩きながら街路樹に目を向けると、イチヨウの葉が黄金色に輝き見頃を迎えていた。秋らしい澄んだ空気が肌に心地よい。空も一段と高く雲一つない、いいお天気だ。

そしてまた信号に差し掛かる。

ここでも信号は青だった。

横断歩道を渡っていると、停止線の先頭に白いセダンが信号待ちをしているのが視界に入る。その直後、その車の後方から物凄い音が聞こえて、思わず私は足を止めてしまい……

玉突き事故だった。後ろで起きた追突の衝撃で押し出された先頭の白いセダンに、私は轢かれてしまった。

奇しくもこの日は、私たち双子の二十五歳の誕生日だった。

当然なっちゃんの結婚式、披露宴への参列は叶わなかった。でも、私のせいで家族全員が欠席する訳にはいかないので、私を除く両親と灯里にはきちんと参列してもらった。

私も心ばかりのお祝いとして、新郎新婦宛てに祝電とお花を贈った。

事故の時の記憶は、頭を強く打ち付けたショックで、皆無に等しい。

だから私を轢いた車の運転手が、よりもよってあの滝沢和範だったことを、お見舞いに来た彼に謝罪されるまで、私は知らなかったのだ。

事故のことは、現場の目撃者や、近くのコンビニの防犯カメラ、事故に巻き込まれた和範や他の人たちのドライブレコーダーから、後方のトラックの運転手が運転を誤ったことが原因だと明らかになった。

和範の車は、信号待ちの停車中でアイドリングストップ状態、ましてや先頭車両のため、過失はない。

だというのに和範は、私を巻き込んでしまったことに責任を感じたらしい。私がICUから一般病棟に移り、面会の許可が下りた日から、毎日お見舞いに来てくれるようになった。

本の虫である私のことを考えて、眼精疲労対策にとアイマスクや目薬、少しでも病室でリラック

スできるようにとアロマグッズを差し入れてくれたり、リハビリが始まれば、元バスケット部のキャプテンだった経験を活かして、足に負担がかからないようにとテーピングをしてくれたり。

和範との再会がこんなかたちになったことに、私は驚き戸惑ったけれど、高校以来、久しぶりに彼とちゃんと向き合うことができ、嬉しかったのもまた事実だ。

気がかりなのは、灯里のことだった。灯里は高校時代に和範と付き合っていた。

その後、二人がいつまで付き合っていたのか私は知らないけれど、少なくとも私が大学進学で実家を出たあと、就職を機に戻ってきた時にはもう灯里は誰とも付き合っていないと言っていたし、和範と会っているという話も聞いたことがない。

二人の様子を見ても、久しぶりの再会だったのは間違いないだろう。

けれど、もしかしたらこの再会をきっかけにもう一度よりを戻す……ということもあるのではないだろうか。そう思うと、胸が痛む。

事実、灯里は私が和範と一緒にいるのを見ると、あとから決まってなにか言いたそうな素振りを見せるのだ。

一方、和範は毎日欠かさず私の様子を見に来ては、甲斐甲斐しく世話をしてくれる。和範には私の責任もないというのに。

私がいることで、二人の邪魔になってしまっているのではないか、そして、このままでは私の怪我のせいで、和範の人生を縛ってしまうことになるのではないか。

和範がいてくれることの嬉しさと、二人への申し訳なきで、私はどうしたらいいのかわからなく

なっていた。

医師から、私の左足に歩行障害が残ることを告げられたのは、私がICUから一般病棟に移つてすぐの時だ。

私はそのことを和範の耳に入れたくなかった。和範がそのことを知れば、気に病んでしまう。下手をすれば、この先の一生をかけて償う、なんて言い出してしまふのではないかと恐ろしかったからだ。

だから私は、少しでも不自由をなくしたくて、リハビリを誰よりも頑張ろうと心に誓った。

偶然にも私のリハビリを担当してくれる療法士さんが、中学時代の同級生である藤本くんだったことも大きな要因だ。

藤本くんこと藤本翔太は、私の初恋の相手だった。

小学校の頃からリトルリーグに所属している野球少年で、他校との練習試合でグラウンドに上がる姿を見て、格好いいなど意識したのがきっかけだった。

中学三年の、最後の総体前に肩の怪我で野球の道をあきらめざるを得なくなった彼を励ましたくて、私はリハビリに関する本を必死になって探した。それを渡して告白するつもりだったのだ。

しかしそんな時、突然灯里に藤本くんのが好きだと告げられた。

恋心を自覚した矢先の出来事に、私の頭の中は真っ白になり、私も藤本くんのが好きだ、な

んて言い出せなかった。言える訳がない、藤本くんは一人しかいないのだから。

灯里が好きだというのなら、私は欲しがってはいけない。

結局私は自分の気持ちを明かせないまま、「一人じゃ不安だから、二人で一緒にプレゼントを渡さない？」という灯里の提案に乗ることになってしまった。

私はリハビリの本を、灯里は手作りのお菓子を用意して、一緒に手渡した。そして灯里がその場で藤本くんに告白をして、藤本くんもその灯里の告白を受け入れたために、私の初恋は呆気なく終わってしまった。

蓋を開けてみれば藤本くんが好きなのは灯里で、はじめから私の出る幕などなかったのだ。私はただ二人を祝福するだけの道化師と化していた。

しかし、付き合い始めた当初は順調だった二人も、受験が近くなるといつの間にか別れていた。そのことを聞いた私の心は複雑だったけれど、それについてとやかく口を挟むことはできず、ひたすら傍観者に徹した。

野球の推薦入学の道を断られた藤本くんは、そのあとかなり勉強を頑張つて県内でも屈指の進学校に実力で合格した。中学を卒業してから会っていなかったのだけれど、それがまさか病院で再会することになるとは思ってもみなかった。聞けば、なんと私がプレゼントしたりハビリの本の影響を受けて、今の職に就いたのだという。現在は理学療法士と作業療法士の両方の資格を取得し、私が入院していた病院に勤務していた。

私が入院中からリハビリもずっと担当してくれて、私の自宅をバリアフリー化するリフォームに

関しても、藤本くんが色々とアドバイスをくれた。

私のように怪我をして身体に障害が残ってしまう人も多いらしく、理学療法士と作業療法士の両方の資格があると、総合的に色々とアドバイスができるからと複数の患者さんの担当を請け負っているのだという。そのため藤本くんの仕事はかなり多忙だ。

私の場合は日常生活に必要な基本動作のリハビリになるので理学療法の対象となるけれど、作業療法士の資格があると、躁鬱病や摂食障害などの精神障害の患者さんもしリハビリの対象になるらしく、私は時々メンタル面でもお世話になっている。といってもカウンセリングのようにきちんとした時間を設けるのではなく、雑談のように話を聞いてくれるだけで、特別なことをしてもらっている訳ではない。

でも、これだけでも全然違う。

退院して以降も、リハビリで通院するたびに、私は藤本くん色々相談をしていた。

藤本くんはとても聞き上手なので、私の中で抱え込んでいたことをゆつくりと、無理なく引き出して寄り添ってくれる。だから、入院中からずっとお見舞いに訪れてリハビリの手伝いすら買ってもらってくれた和範のことも、見ていてなにかしら感じるものがあったのだろう。

何気ない会話から和範への思いもある程度話しており、色々私の愚痴を聞いてもらっていた。藤本くんは、私の心の負担になることはなにも言わずに、ただ私の気持ちに寄り添って聞かれる。藤本くんが話を聞いてくれたからこそ、こうやって私も落ち着いていられるのだと思う。

それでも、灯里と和範のこと……和範が愛しているのは私ではなく灯里なのだとすることは、話すことができないでいた。昔のこととはいえ、かつて灯里のことが好きだった藤本くんにそれを相談するのは、悪い気がしたからだ。

だから、和範に対する悩みの根本的なところは、誰にも相談できないままだった。

私は、自分の足に障害が残るかもしれない、ということ退院するまで和範に打ち明けることができなかった。

そもそも、自分自身そのことを信じたくなかったのだ。

医師からの宣告だって、リハビリを頑張れば覆るかもしれない。

奇跡が起こるかもしれない。

なにより、いつも仕事が終わってから病院に顔を出してくれる和範の負担をこれ以上増やしたくない。

その思いで、リハビリを頑張った。

傍から見ればきつと鬼気迫るものがあっただろう。

でも結局は、なんとか杖を突いて歩けるまでに回復したものの、私の左足には医師の宣告通りに障害が残ってしまった。

ほんの数メートルだって自分の足だけでは歩けないし、当然ながら走れもしない。

私はこの事実を受け入れるしかなかった。

いくら内緒にしても、私の足に障害が残ってしまったことは、退院後も杖を手放せない私の

姿を見れば誰の目にも明らかだった。

そして事故からちょうど一年たった日、その時は訪れた。

私は和範からプロポーズをされたのだ。

私にとってプロポーズは、人生で一番嬉しい瞬間になるはずだったのに、そこにあったのは絶望だった。私のこの怪我のせいで和範の人生を大きく変えてしまったのだ。

この足に後遺症が残ってしまったために……

「その足のこと、僕に責任を取らせてほしい。これから僕が、光里ちゃんの足になる。一生、君を支えていきたい。だから、僕と結婚してください」

リハビリの帰り道、自宅に送ってくれた和範に突然告げられた言葉。

誕生日に、ずっと好きだった人からプロポーズをされたのだ。

嬉しくないはずがない。

だって、私の一生を支えていくなんで、これが普通の恋愛を経たプロポーズだったら、私は泣いて喜んで素直にその言葉を受けていたに違いない。

でも私にはできなかった。私は知っていたのだ、その言葉が心からの愛情によるものではないと。

和範は私の怪我の責任を取っているだけ。

私は気付いてしまった。

和範は、高校時代からずっと、灯里を想い続けていたことを。

そして灯里も、事故で和範と再会してから、あの頃の恋心に再び火が灯ったのだと。

灯里は普段通りに振る舞っているつもりでも、和範がそばにしていると彼を意識しているのが私には伝わっている。

他の人にはわからなくても、小さな頃から一緒に育ってきた私だからこそわかることだ。

灯里は、私と和範が一緒にいる時は、決まってあとでなにか言いたそうにしていた。

そんな様子から、私の事故で和範と再会したことをきっかけに、よりを戻したくなったのではないかと思ったのだ。二人の過去にどのような歴史があるのかなんて私は知らないから、憶測ではないけれど。

だからこそそんな二人の邪魔はできなくて、私は自分の心の中を見ない振りをして、和範のプロポーズを断った。

でもそれから、和範は根気強く何度も私のタイミングを見計らってプロポーズしてくれた。その都度私は断り続ける。結局、同じやり取りを繰り返したのかわからなくなるくらいプロポーズされ続け、最終的に私が折れる形で受け入れたのが、最初のプロポーズから一年後。今からおよそ三ヶ月前のことだ。

それから現在に至る。

私が最初にプロポーズをされた日から、灯里はそれまでの、私たちになにか言いたそうな素振りをしなくなった。

もしかしたら、灯里に和範への想いをあきらめさせてしまったのかもしれない。

灯里にしか、灯里の気持ちはわからないけれど……

婚約するに当たり、和範は、私に名前を呼び捨てするように言った。

それまでずっと『滝沢くん』呼びだった私は、突然の申し出に戸惑いを隠せない。
なので、急にどうして？ と聞いてみた。

和範は、みんなが自分のことを『カズ』と呼ぶから、婚約者である私にだけは違う呼び方をされたいのだという。

「呼び捨てだなんてとんでもない。カズくんじゃ駄目なの？」
と、聞いてみるものの、なんだか照れるからと却下され、『和範』と呼ぶことになった。

名前を呼び捨てにするのはなんだか特別な許可をもらったみたいで、戸惑い半分、嬉しさ半分の複雑な思いだ。

灯里ですら呼んでいない、私だけの特別な呼び方で彼を呼べるなんて、本当は嬉しいに決まっている。

周りの人たちに、彼のことを呼び捨てにして偉そうだと思われるか不安だったけれど、それは杞憂きゆうに終わった。

和範の周りの人たちは、私たちを温かく見守ってくれている。婚約したてのラブラブな期間で羨うらやましい、なんて冷やかされたこともあるくらいだ。

でも和範の名を口に出すたびに、どうしても灯里の顔が頭に浮かぶ。
それに、未だ和範は私を『光里ちゃん』と呼んでいる。

出会った頃と変わらない、丁寧というより、他人行儀な呼び方……

過去の経緯を思い出しながら車窓をぼんやりと眺めていると、車はいつの間にか私の自宅前に到着していた。

灯里はこの時間、ダイニングバーに出動しているので、我が家の車庫は車一台分の駐車スペースが空いている。

和範はそこに車を停めると、私の荷物を降ろして助手席のドアを開けてくれた。

一月最後のこの日は、朝から寒さの厳しい日だっただけに、夜になった今はますます、開いたドアから入ってくる風が冷たく感じる。

暖かい車内から一歩外に出るだけで、肌を突き刺すような冷気が全身を覆った。

「いつも遅くまで待たせてごめんね」
今更ながら、残業で待たせてしまったことを詫びると、和範はなんてことはないといった表情で私を見つめる。

「月末だし、忙しいのはわかっているから大丈夫だよ。それに、こんな僕でも頑張ってる光里ちゃんの役に立てて嬉しい」

駐車場の陰、人目に付かない場所で、私たちはそっと唇に触れる程度のキスをする。

婚約をしたのだから、こうやってキスをされることは当たり前になってきたけれど、どうしても、灯里のことが頭をよぎる。

本当に、和範のそばにいるのは私でいいの？

私の表情を見て、和範は広い胸に私をそっと抱き寄せる。

「今日は遅くまで頑張ったんだから、ゆっくり休んで。明日からまた頑張ろう」

和範の胸の鼓動を感じて、その優しさに触れながら、私は泣きそうになるのをぐっとこらえた。うん、と頷くと、和範は私の手を取り、玄関前でゆっくりとエスコートしてくれる。

バッグの中から鍵を取り出して開錠しようとした時、家の中から物音が聞こえ、玄関のドアが勢いよく開かれた。

「おかえり、光里。和範くん、いつもありがとうね。もし晩ご飯まだだったら、うちで一緒に食べていいかな？」

玄関から出てきたのは母だった。和範は母のお気に入りだ。おそらく、車庫に和範の車が入ってきたのがリビングから見えたのだろう。

先ほどのキスはリビングから陰になる場所だったので、母に見られてはいないはずだけれど、それでもやはり恥ずかしい。

「こんばんは、お義母さん。せっかくのお誘いなんですけど、僕も明日が早いので今日はもう帰ろうと思います」

和範はそう言って、母の提案をやりわりと断った。先ほど和範の誘いを、疲れているからと断った私を氣遣つてのことだろう。

「え？ そうなの？ そしたらご飯はどうするつもり？ お腹空いてるでしょう」
母は驚いて私たちを見つめている。

私は、小さく頷くことしかできなくて、和範は困つたなあと苦笑いしている。

「それなら尚更のこと、ちょっとだけでも上がって！ お弁当詰めるから。ほら、寒いから光里も早く中に入りなさい」

母に押し切られて、私たちは一緒に家の中に入った。

母は手早く来客用のスリッパを用意して和範に履かせると、急いでキッチンへと向かう。

私も玄関脇に置いたスツールに座って靴を脱ぎ、スリッパに履き替えた。

杖は屋外用と室内用を使い分けており、家の中ではスツールの傍らに立てかけてある室内用のものを使っている。杖も携帯に便利な折り畳み式のものや色々な長さのものがあり、もはやちょっとしたコレクションだ。

使い心地がそれぞれに違うため、現在愛用している杖に出会うまで、何本も購入した結果がこれである。もし両親が老後に杖を使う機会ができたなら、この中から活用してくれればいいのだけれど。私がスツールから立ち上がるまで、和範はそばで待っていてくれる。

その心遣いが嬉しいのに、反面胸が苦しくて、天邪鬼な私はまっすぐ顔を見てお礼すら言えない。「ありがとう」

和範のほうは見ずに、そう小さな声で呟いた。

そんな私のことを、和範はどう思っているのだろう。和範は私のバッグを持って、反対の手で私をそっと優しく支えてくれる。

リビングのドアを開けると、キッチンでは早速母が鼻歌を歌いながらお弁当を詰めていた。

使い捨て用のフードパックに、今日の夕飯のおかずであるハンバーグ、卵焼き、ポテトサラダ、葉物野菜を詰め、おにぎりを握っている。

「今日のおかずは、灯里が作ったから美味しいわよ」

母のその言葉が、私の心に小さな傷をつける。和範はきつと、帰宅したら最愛の人の手料理を喜んで綺麗に平らげるだろう。

「やった。プロの料理がタダで食べられるなんてラッキーです」

メンタルの弱い私は、和範の無邪気な返事にまたもや心が苦しくなる。

私の心に、再び小さな傷がついた。

「でしょう？ 私の作る料理より美味しいから、参っちゃうわ」

「灯里にもお礼、伝えてください」

「もちろんよ」

母と和範のやり取りに、私の心は三度みな小さな傷がつく。

その呼び方だ。

私は『光里ちゃん』で、灯里は『灯里』と呼び捨て。

高校時代から二人は同じ商業科のクラスメイトで仲が良く、おまけに当時付き合っていたのだ。だからその距離の近さは仕方ないのかもしれない。

でも、今の私は仮にも和範の婚約者だ。なのに物理的な距離感も心の距離感も、婚約前となら変わらない。

しかも決定的なことに、私は和範から一度たりとも『好きだ』と言われたことがない。

だから余計、婚約者という肩書きに違和感を覚えてしまうのだろう。

母と和範の和やかな空気に水を差すようなことはしたくないので、私は一人そつと洗面所へ手洗いうがいをしに向かった。

洗面所から出ると、母に弁当を詰めてもらった和範が帰宅しようと、ちょうど廊下に出てきたところだった。

「じゃあ、帰るね」

いつも通りの穏やかな口調で、和範は私に声を掛ける。

その手は、母が詰めたお弁当を大事そうに抱えている。

それを見るだけで、なんだか胸が締め付けられそうになる。

「うん、いつもありがとう。気を付けて帰ってね」

なので私はその包みを見ない振りをして、玄関のホールまで見送りに出た。

本当なら玄関先まで出て車が見えなくなるまで見送りたいけれど、足に負担がかかるからと制されて、いつもここまでだ。

まるで、ここに二人をへだてる見えない壁が立ちはだかるかのように思える。

和範は、帰ったら連絡すると言って玄関を後にした。

ドアが閉まると、和範が帰ってしまっただけで淋しい気持ちと、灯里に嫉妬してしまういやな気持ちと、自分の思うように動けないもどかしさ、色々な感情が入り混じって、自己嫌悪おちいに陥る。

しばらく立ち尽くしているとリビングから母の呼ぶ声が聞こえてきたので、私は玄関の鍵をかけてから、杖を突いてリビングへ戻った。

「ほら、早くご飯食べなさい」

母に促されるまま、私はダイニングの椅子に座る。

「もう、なんて顔してるの。そんな顔するくらいなら和範くんに『泊まっていつて』くらい言えば良かったのに」

婚約者なんだから、と笑いながら母は言う。

でも、私が素直に気持ちを伝えたところで、和範はきつと今までの私と違う言動に戸惑うだけではないだろうか。

それに、もし仮にお泊まりを提案したとして、和範が灯里と一つ屋根の下にいるという状態に、果たして私は耐えられるのだろうか。

それは無理だ。きつと耐えられない。

それなら今日みたいに帰ってもらったほうがいい。

和範と灯里が顔を合わせないうちに……

灯里の作ってくれた夕飯を、時間が遅いからと量を控え目に食べ、お風呂に入りなさいと言う母の声に従って部屋へ着替えを取りに行った。

私の怪我がきつかけで、この家は大々的なリフォーム工事を行った。そのリフォーム工事を請け負ったのが、和範の実家である滝沢建設だ。

私の入院中、和範のお父さんがわざわざうちにまで足を運び、息子の車で怪我を負わせたのだから無償で工事をさせて欲しいと言ってくれたのだという。

でも、私の両親も、材料費や人件費だけでもきつと結構な金額になるはずだからと言って、譲りなかつた。

両者の話し合いの結果、市場の相場よりもかなり格安で工事をしてもらう、というところに落ちついた。

両親は、『いずれ自分たちにも必要だから』と、家の中の至るところに手摺を付け、バリアフリー対応をしてくれた。その監修をしてくれたのは、藤本くんだ。

それらは全て、私が入院中に行われていたことだったので、退院して実際に自分の目で確かめて驚いたのを、今でも覚えている。

階段の昇降が辛いので、私の部屋は二階の日当たりのいい部屋から、一階にある父の書斎として使っていた六畳の洋室に移動した。

本当ならリハビリも兼ねてそのまま慣れた部屋で過ごしたほうがいいのだけど、どうしても荷物を持って階段の昇降ができなかつたので、父にお願いして部屋を取り替えてもらった。階段昇降の練習は、在宅時に時間を決めて毎日行っている。

和範も階段の昇降や段差に関してはかなり神経質になっており、私と出掛ける時は、できるだけ段差のないバリアフリーの場所を事前に調べているようだ。

職場の送り迎え以外ではまだそんなに一緒に出掛けることはないけれど、たまに食事に連れて

いつてもらう時は、階段などのないフラットな造りのお店ばかりだった。

私としては階段の昇降に慣れるのも大事だからそこまで気にしなくていいと伝えていたけれど、過去に自分自身が階段を踏み外して怪我をしたことがあるらしく、ましてや私は現在健常者とは違うから、杖が滑り止めに引つかかるなど不慮の事故があったらいやだから、と言って聞かない。

日頃穏やかな性格だけれど、こうだと決めたら意思を曲げない頑固な一面もある。それに、私のことを思っていることだからなにも言い返さないでいる。

随分と過保護に扱われている気もするけれど、これから休みが合えば一緒に色々な場所に出掛けるようになるからと言って、案外和範自身はこのリサーチを楽しんでいるみたいだ。

でも実際問題としてお互い休みが合うことが少ないし、なにより私自身が和範との外出を避けてしまいがちだから、リサーチは無駄に終わることになるかもしれない。

部屋から着替えを持って浴室へ向かう。

家の中全てに手摺てすりを付けたとは言え、ドアには手摺てすりは付けられないので、やはり家の中でも杖は必需品だ。

脱衣所で服を脱ぎながら、私は鏡の前に立ち、溜息を吐く。

私の左足は事故後に手術を受けて、傷口が目立たなくなるようにしてもらったけれど、やはり痕あとは残っている。

そして、右胸の内側にあるホクロ。

和範はこれを覚えているだろうか。

このホクロを見るたびに、私の忘れられない、いや、忘れたくない記憶が蘇る。

和範はきつと覚えてはいないだろう。

和範が私を灯里だと勘違いしたあの日、私が犯した罪の記憶……

私が初めて和範と出会ったのは、高校一年の夏休みに入ったある日のこと。

灯里は誰とでもすぐに打ち解けられる明るい性格で、男女問わず人気者だった。

対する私は、双子だけあり顔立ちは似ているものの、引つ込み思案しあんでいつも灯里の後ろにいるような子だった。

私にとって灯里はいつだってキラキラと眩しい存在だ。

双子といっても、私たち姉妹は性格が全くの正反対。

だから付き合う友達も自然と対照的になる。灯里の周りには性別を問わずに目立つ子が多く、私の周りはどこらかと言えば、控えめで地味な女の子ばかり。

この日も、灯里の友達が男女問わずみんな家で宿題をしに来ることになっていた。

私は朝一番で市内にある図書館へ行き、本を借りるついでに冷房のほどよく効いたそこで宿題を済ませていた。

宿題の中で難しい箇所がいくつかあったので、その足で学校にも寄って職員室を覗き、先生を捕まえて教わった。

夏休み期間とは言え学校へ行くなら制服じゃなきゃ明らかに浮いてしまうので、家を出る時に制服を着用していたのだ。

今日一日でやることを全て済ませ、それでも帰宅したのは十五時前。

玄関の三和土たきに並ぶたくさんの靴を見て、やはり帰るのが早すぎてしまったようだと思悔した。かといって、再び図書館へ戻る気にもなれなかった。なぜなら外は日差しが強く、図書館から帰宅しただけで既に汗だく状態、できることなら早くシャワーで汗を流し替えてさっぱりしたかったのだ。

しかし帰宅してすぐ、母から灯里の友達に三時のお茶とお菓子の差し入れを頼まれてしまった。差し入れだけならすぐに済むと思ひ引き受けたものの、やはり後悔することとなる。あとの祭りとはこのことを言うのだろうか。

「わあ、例の双子の妹ちゃん？ 灯里と全然雰囲気違うね」

「でも凄い賢い子なんだろう？ この前の学年テストでトップだったんだって？」

「灯里とは頭の出来が違うんだなあ」

「妹ちゃん、確か図書委員やってるよね？ なんかそれっぽい。イメージぴったり！」

「てか、なんで今日も制服？ もしかして休みなのに学校行ってたの？」

「ねえ、こっち座って灯里が戻ったら並んでみて！」

灯里の部屋のドアを開けた瞬間、みんなの視線が一斉に私に集まったかと思えば、好き勝手に口を開く。

科もクラスも違うから話もしたことのない初対面に近い人ばかりに囲まれて、正直怖かった。

灯里の友達だけあつてきつとみんな気さくでいい人なんだろうけれど、人見知りのひどい私には輪の中に入る勇氣なんてない。

灯里の友達に色々と言葉を投げかけられ、そのくせ私に返答する隙を与えてくれなくて、まるで見世物小屋の中にいる客寄せパンダ状態になってしまったようだ。

みんなは私服で仲良さそうにしている中、私一人制服を着用したままで、おまけに帰宅してすぐだから汗だくで、完全に浮いてしまっている。こんな状態、耐えられる訳がない。いつだってそう。

幼少時代から私たちは双子っていうだけで周囲、特に初対面の人たちからは好奇の目で見られてしまう。私はそれがいやでたまらなかつた。

灯里は昔から笑顔で上手にあしらっていたけれど、私にはそれがどうしてもできなかった。灯里を見習ってスルースキルを身に付けなければ、これから先も自分がしんどいだけだと充分理解しているものの、実際にできるとは限らない。笑顔でみんなを魅了する灯里を私はいつだって羨ましく思っていた。

灯里のように振る舞えたらどれだけいいだろうと憧れるものの、なかなか行動には移せない。

やめて欲しいと反論したくても、ここにいるのは灯里の友達だ。気を悪くしたらと思うと、自分の思っていることを口に出せなくて、自分の中で感情の折り合いが付かず——感情が昂つて涙が出そうになった時、助け船を出してくれた男の子がいた。

身長が高く、顔立ちもはっきりとした正統派のイケメンさんだ。

「みんなやめろ。急にそんなに取り囲んだら、妹ちゃんびつくりするだろ」

さりげなく私の前に立って、庇ってくれた。

「カズ、やさしーっ。さすがモテ男は違うね」

「妹ちゃん、ごめんね」

「ごめんね、双子ってナマで見たことなく興奮しちゃった」

「ごめん……って、あれ？ 妹ちゃん、泣いてる？」

「えっ、うそっ。なんで？」

初対面の人たちに囲まれて、ただでさえ自分の感情を抑えきれずに泣きそうになっていたところに、私のことを庇ってくれる男の子の優しさに触れて、ついに涙が溢れてしまった。

「光里っ、大丈夫？」

トイレから戻ってきたらしい灯里が私の置かれている状況を察すると、すぐに私を部屋から廊下へ連れ出した。

先ほど私を庇ってくれた男の子も私たちと一緒に廊下に出て、他の子たちは部屋に残った。

「光里、ごめんね。多分みんな悪気があったんじゃないと思うけど、急に自分の知らない子にあんな風に囲まれたらびつくりするよね」

灯里が私に気を遣いながらも友人たちに他意はないことをそれとなく告げている。それに同調するように一緒に部屋を出てきた男の子が私に声を掛けた。さっき私のことを庇ってくれた『カズ』と呼ばれていた子だ。

「光里ちゃん、って言うんだね。名前知らなかったから、妹ちゃんなんて呼んでごめん。僕は、滝沢和範。灯里と同じクラスで、今日のメンバーもそうなんだけど、いつも一緒にいるからあとで注意しとくよ」

灯里と和範に慰められて、私は急に恥ずかしくなった。

みんなはなにも悪くないのに、私に原因があるのに……

私が灯里みたいに社交的になれたら、こんな風にみんなに気を遣わせることなんてなかった。

二人から謝罪され、なんだか決まりが悪くて俯いたまま、私は口を開いた。

「私こそごめんね。急に囲まれてびっくりしちゃって、泣くつもりなんてなかったのに。中のみんなにも謝っておいて。滝沢くん。私、昔から人見知りがひどくて。びっくりさせてごめんなさい」

二人に謝ってから、私は逃げるように自分の部屋に駆け込むと、ドアにもたれてしゃがみこんだ。

二人はこんな私を見てどう思っただろう。高校生にもなってその程度のことですごく泣くなんて、と引いたのだろうか。

灯里は私の性格を把握しているからそうは思わないかもしれないけれど、他の人からすれば、私は灯里と違って付き合いつらい人間だと思っただろう。

やっぱり早く帰るんじゃないかな。

私は制服から普段着に着替えを済ませ、灯里の部屋でみんなが盛り上がりつつあるのを廊下から確認すると、シャワーを浴びることをあきらめ、足音を忍ばせてそっと自宅を出た。

ガラガラと照り付ける日差しを浴びながら、向かった先は先ほどまでいた図書館だ。私にはやは

り、そこしか行く場所が思い付かなかった。

再び図書館の中に足を踏み入れると、夏休み期間ということもあり館内は先ほどと変わらず学生らしき人が多い。私はなんとか空席を見付けるとそこに荷物を置いて場所を取り、さっきまでここで読んでいた本を本棚に取りに行って座席に座った。

席に着いてようやく落ち着き、読みかけていた本の続きのページを開いた。

やっぱり本の世界はいいな。

いやなことを一瞬で忘れさせてくれる。

私は夢中になってその本を読み耽った。

あつという間に時間が過ぎて、閉館を知らせるメロディが流れ始めたのにも気付かないでいると、不意に右手をツンツンとつつかれた。

それですよやく閉館時間だと気付いたけれど、私の右手をつついたのは、さっき自宅で初めて会ったはずの和範だった。

「凄い集中力だね。二時間以上、横に座っていたんだけど全然気付いてくれなかった」

え？ 二時間以上？ 和範の言葉に愕然とした。

ここに来たのが十五時半くらいだったから、和範は十六時前にはここにいたの？

じゃあ、灯里たちはあのとすぐに解散したのだろうか？ もしかすると、私のせいで……？

「光里ちゃんが出ていったのが気になって、僕だけ抜けてきたんだ。みんなは多分、もうそろそろ解散するはずだよ」

私はそっと自宅を出たつもりだったので、まさか和範に気付かれていたとは思ってもみなかった。「大丈夫だよ。光里ちゃんが出掛けたのは誰も気付いてないから。僕は用事を思い出したって言って抜けたんだ」

私の表情を読んだのか、和範が言葉を続ける。

「もう閉館時間だし、とりあえずここは出ようか」

私は頷いて書籍を本棚に戻すと、和範と一緒に図書館を後にした。

「あれだけの集中力があるから、学校の成績も優秀なんだって実感したよ。本当に凄い、尊敬する」

興奮気味の和範は私に声を掛けてくれるけれど、そんな和範に対して私は相変わらずどう反応すればいいのかかわからず、下を向いたままだ。

そんな愛想のない私にお構いなしで、和範は話を続ける。

「灯里とは二卵性の双子なんだって？ 顔立ちはそのくりなのに、雰囲気全然違うから驚いたよ」

この時の私の髪型は、顎あごのラインで切り揃そろえたショートボブだった。

灯里はもつと長い上に、ふわふわのウェーブがかかかっていて雰囲気はまるで違う。

たとえるなら、灯里はまるで西洋人形のような華やかさで、砂糖菓子みたいに甘くてかわいいイメージだ。

対する私は、日本人形のように地味で堅物、きつとそんなイメージだろう。

「私は灯里みたいに明るくないから……」

思わず卑屈なことを言ってしまう。

けれど、和範はそんな私の言葉をすぐさま否定した。

「うん。確かに灯里と違って光里ちゃんは落ち着いていると思うけど、さっきみたいに本を読んでいる姿を見ていたら、すごく楽しそうで……かわいって思ったよ」

和範の言葉に、私は驚いた。

これまで『灯里と違って』と言われる時は決まって、明るくないとか付き合いづらいか、そんなネガティブなことばかりだった。

それなのにこんな風にほめられるのは、ましてやかわいいなんて言われるのは初めてで、どうしたらいいかわからない。

「僕は灯里みたいな天真爛漫てんしんらんまんな笑顔が、光里ちゃんからも見られると嬉しいな」

そう言って和範は、自宅はこちだから、と言って別れた。

和範の言葉が頭から離れない。

人見知りで壁を作っている私。その壁をいとも簡単に飛び越えてストレートな言葉をくれた和範に、私が恋に落ちた瞬間だった。

しばらくその恋の始まりの余韻に浸りたくてその場に立ち尽くしていたけれど、犬の散歩をしている人に不審な目を向けられたので急いで家路に就いた。帰宅すると、灯里が今日のことを謝罪しに私の部屋にやってきた。

「今日はごめんね。さっきの子たちも、悪気はなかったの。みんな私がこんな性格だから、きつと光里も一緒なんだろうって思ってた、私と同じノリで接しちゃったみたい。びつくりさせてごめんねって謝ってたよ」

部屋に入ってきた灯里は、開口一番にこう告げた。

灯里に謝罪され、和範にも気遣われ——灯里の友達が悪い訳じゃないのに逃げ出してしまったよ、うで、なんだか申し訳なくて心苦しかった。

どうして私は、灯里みたいになれないんだろう。

二卵性でも、私たちは双子なのに。同じ環境で育っているのに、どうしてだろう。

落ち込む私に、灯里はいつも言ってくれる。

「光里は光里のままでもいいんだよ」

灯里はその言葉を幾度となく口にするけれど、果たしてそれでいいのだろうか。

私は私のままって、一体私はどうすれば……

「光里には光里の良さがあるの。それを私が一番よく知ってる。だから大丈夫だよ。光里は光里らしくいてね」

灯里の言葉に、私は泣きそうになる。灯里の言葉は、決して私という存在を否定しない。

けれど私は、昔のままにも変わらないでいる。

言葉を呑み込み、心配をかけないように微笑むと、灯里の表情はくしゃくしゃの笑顔になる。

私は意を決して灯里に問いかけた。

「灯里、あのね。今日の、滝沢くんなんだけれど……。灯里は、その……。仲がいいの？」

私の言葉を聞いて、灯里は一瞬固まったけど、すぐに先ほどの笑顔に戻る。そんな灯里の様子が気になりながらも、敢えて気が付かない振りをしていて、灯里は私の問いに答えた。

「カズ？ うん、普通に仲いいよ。……もしかして光里、カズのこと好きになった？」

その言葉を聞いて、私は不意に藤本くんのことを思い出した。私が告白しようと思った矢先に、彼を好きだと言った灯里。

今はあの時とは違っているとわかっていても、素直に自分の気持ちを口に出すのが怖い。

そんな私のほうを見て、灯里はどこか期待するような、あるいは試すような視線を向けている。

口ごもったままの私をしばらく見つめると、灯里は再度口を開いた。

「ごめん、今のは嘘。実は私、カズのことを好きなの。……だから、もしかして光里もそうなんじゃないかなって」

まただ。私が好きになる人は、灯里も好きになる。そしてきっとその人は、灯里を選ぶ。

私は、選ばれない。

いつだって私は灯里の引き立て役にしかなれないのだ。

「……今日、初めて会話した人だよ？ そんな、好きだなんて」

私の心の動揺を灯里に悟られてはダメだ。私は必死に自分の心の中を見ない振りをする。「だって、ここでカズの話が出てくると思わなかったから」

私を見つめる灯里。

私は咄嗟に否定の意味を込めて首を横に振るものの、灯里はそんな私をじっと見ている。どのくらい時間が経っただろう。ほんの数秒が、やけに長く感じてしまう。

灯里はにっこりと天使の笑顔を見せて、言葉を発した。

「うん、わかった。…光里、大好きだよ」

灯里が私にぎゅっと抱き着いてくる。私はそんな灯里の背中に手を回した。

灯里は昔から不安があつたりすると、こうして私に抱き着いてきた。

やはり今日も微かに灯里は震えている。

そんなに和範のことが好きなんだね…

私は、この日芽生えた恋心にそっと蓋をした。

灯里の恋路の邪魔はしたくない。

灯里の好きなものを、欲しがってはいけない。和範は一人しかいないのだ。

私は所詮灯里の引き立て役だし、和範はあんなにも優しく格好がいいのだから、地味な私のことと好きになんてなるはずがない。今日の優しさだって、きっとみんなにも同じようにしているに違いない。

夕飯が終わり一番風呂に入った私は、湯船の中で涙を流していた。

元々科もクラスも違うから、接点もなにもない。

中学生の頃のように、藤本くんのように、想いを封じればいい。

涙はとめどなく溢れてくる。

声を出したら、きっと私の気持ちは灯里にバレてしまう。

私は声を殺して泣いた。

浴室から出て、洗面所を兼ねた脱衣室でパジャマに着替えていると、灯里が入ってきた。

浴室内は常に換気扇を回していたけれど、湯気の回りが早く、脱衣室も蒸し暑くなっている。

「今日は珍しくお風呂、ゆつくりだったんだね？」

灯里の問いに、髪をタオルドライしながら答える。

「うん、半身浴してたの」

そんなことはもちろん嘘だ。

なかなか涙が止まらなくて顔をお湯に浸けたりお湯をかけたりとごまかすのに必死だった、なんて言える訳がない。

「へえ、半身浴？ 代謝良くなりそう。って、光里、大丈夫？ なんだか顔が疲れてるよ？ 長い

時間お風呂場にいたから、脱水してるんじゃない？ 早く水分とったほうがいいよ」

心配顔の灯里が私の顔を覗き込む。

「うん、ありがとう。ちよつとのぼせたかも」

私はかごに入れてあるドライヤーを取って、洗面所を後にした。

そんな私を、灯里がなにか言いたげな顔で見つめているような気がしたけれど、私はそのまま台所へ向かい、冷蔵庫の中にあつた冷えた麦茶を飲んで水分補給をした。